

# 野間宏における《政治》と《文学》

——一九六〇年代の状況

尾 西 康 充

## 一

一九五二年五月一日、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約に抗議し、警察予備隊の「再軍備反対」と「人民広場（皇居前広場）の開放」を要求するデモ隊が皇居前広場周辺で警官隊と衝突した。デモ隊側の死者二名、重軽傷者千数百人に達し、警官隊側も負傷者が八〇〇名に上ったことから、戦後初のこのメーデーは「血のメーデー事件」と呼ばれるようになった。デモ隊が過激な行動をとった背景には、日本共産党が一九五一年一〇月の第五回全国協議会で「日本共産党の当面の要求——新しい綱領」を採択し、武装闘争方針を掲げていたことがあった。このときデモに参加した野間宏の様子を、新日本文学会組織部の専任書記としてみずからもデモに加わっていた窪田精は、つぎのように描写している。

私のすぐ傍ら、三メートルぐらいの距離のところに、車座になってすわりこんでいる男たちの真んかに、はちきれんばかりにふとった大きな体の男が一人、あぐらをかい

てすわっていた。それが野間宏であった。  
野間宏はいつもの背広ではなく、古ジャンパーに作業ズボンのようなものをはき、ズック靴にゲートル——という服装だった。

古いジャンパーに作業ズボン、それにズック靴にゲートルというのは、自労や土建の労働者などならともかく、メーデーに参加する文学者の服装としては、めずらしいものだった。それに大きなからだにくらべて、身につけているもののサイズがすべてちいさすぎるのか。野間宏のからだは、よけいにはちきれんばかりにふとつてみえるのだった。そして、その大きな体の両方の肩から、水筒（のようなもの）と弁当いれらしきズックのカバンとタスキのように十文字にかけていた。それが、もののしく、異様な感じであった。<sup>1</sup>  
新日本文学会のメンバーの多くが「背広」や「軽装」で集まっていたのに比べて、「古いジャンパーに作業ズボン、それにズック靴にゲートル」という野間の服装は、彼が労働者とともに、むしろ労働者の一人として意識的にデモに参加しようとしていたことが分かる。

一九五〇年の党分裂にともなう文学団体の分裂に際し、野間は、職場文学サークル運動を通じて労働者自身による作品創造を推進した「人民文学」グループに参加したが、専門作家による創作活動に評価を与えていた「新日本文学」グループとの関係修復に努めたとされる。だが六〇年代になると、党中央に復権し執行部を固めていた宮本顕治や袴田里美たちとの間で次第に対立が深まって、最後は除名処分を受けることになる。処分に至る経緯を振り返りながら、野間における《政治》と《文学》の関係を考察してみよう。

## 二

日本共産党第七回大会は一九五八年七月二日～八月一日に開かれた。党綱領草案をめぐって、宮本顕治の「反帝・反独占の民主主義革命」論と、春日庄次郎に代表される「構造改革・社会主義革命」論との間で意見対立が生じた。宮本は、当時の日本社会を「高度に発達した資本主義国でありながら、アメリカ帝国主義になかば占領された事実上の従属国」と規定し、独占資本とアメリカ帝国主義という《二つの敵》に対する民族解放民主革命を基本方針とした。民族解放民主革命、すなわち人民の民主主義革命から社会主義革命へという二段階革命論は、一九三〇年代の日本資本主義論争における講座派にまで遡る日本共産党の基礎理論ともいえるものであった。

これに対して春日は、日本帝国主義が自立発展しているとし、独占資本を打倒する社会主義革命を目指す一段階革命論を掲げた。党内外の革新的分子を結集し、社会党を含めた革新戦線の統一を通じて、平和的な民主改革を推進しようとするものであった。春日にとつて、宮本の理論は戦後の日本社会とかけ離れた、かつてコミンテルンから与えられた「三年テーゼ」と同じものにしかみえなかったのである。ところが、宮本からみれば、支配機構の根本的変革ではなく部分的な構造改革を進めようとしていた春日の方針は、国家権力を奪取するという革命政党の第一目標から外れたものであり、アメリカ帝国主義に対する対決を回避する「現代修正主義」——アメリカとの平和共存を唱えるフルシチョフ路線——であった。

この大会では、五〇年に生じた党分裂の原因の一つが徳田球一書記長の「家父長的個人中心指導」であったという反省に立つて、党中央委員会は（一）「いかなる事態に際しても党の統一と団結、とくに中央委員会の統一と団結をまもること」、（二）「民主集中制と集団指導の原則を貫くこと」、（三）「中央委員会内部の団結とともに中央と地方組織との団結」、（四）「いかなる場合にも党の内部問題を党外にもち出さず、それを党内で解決する努力」、（五）「中央委員会をはじめとする全党がマルクス・レーニン主義理論の学習を組織し、党の政治的、理論的水準を向上させるために努力すること」を教訓として示した。<sup>2)</sup>

分裂という事態を二度と招かないために、民主集中制と集団

指導の重要性が繰り返し強調された。その際、具体的に「下級の意見を集約し、党の政策と戦術を決定し、これを全党に返して党の行動を強力に実践する」ことが求められるとともに、「下級と党員大衆は上級と指導機関の決定と指導について、全体の意見と経験にもとづく集約されたものとしてこれを尊重し、その実践に力をそそがなければならない」とすることが確認されることになった。この原則は革命政党としての党内の引き締めのためにも使われた。

上級の指導や決定にたいして、これを実行にうつす原則的態度を拒否したりあいまいにする傾向がある。これを徹底的に克服しなければ党内民主主義は党を解体にみちびくものとなる。たとえば、上級が誤った決定をしたと考え意見を上級にのべた場合は、実行を保留しようとか、決定を実行しなくともよいとか、上級の決定と下級の決定は抵触してもよいという考えである。党内民主主義が集中的指導のもとにある民主主義であり、党の統一的な革命の実践のためのものであることを忘れたこのような傾向は、ついに党を破壊する反党的行動にみちびくことは全党連グループの最近の事件で明らかである。上級の集中的指導を否定し、無制限な党内民主主義を要求する考え方は、さまざまな形であらわれているが、これは民主集中制の原則を否定する党についての修正主義的偏向である。<sup>3)</sup>

ここで《政治》と《文学》の立場の軋轢が生じる。止むこと

のない懷疑と尽きることの無い議論が文学本来のあり方だとすると、党の規約にそれを当てはめて考えれば、文学者はみな「修正主義的偏向」におちいつており、文芸誌は「形式的な内容のない討論クラブ」にすぎないことになるだろう。<sup>4)</sup>

一九六四年六月一日、野間宏を含む一二名の党員文化人は、部分的核実験停止条約をめぐるソ連との対立が明確になった党の基本政策の再検討を求める要請書を提出した。そのなかには、党指導部の「偏向」と「官僚的な指導」を厳しく批判する言葉が記されていた。

われわれは、党の存在と実践のために規律の重要な意味を知っている。しかし、規律や決定の名において、党員心理を呪縛してきたいまわしい慣行をこれ以上黙過しておくならば、「五〇年問題」の惨たる悲劇を経てわが党の健全な伝統が発揮した六全協の精神は遂に死滅し、党の行方はプロレタリア国際主義の原則からも現綱領からも逸脱し去るのは必至であろう。<sup>5)</sup>

これは文学・文化の立場からの主張といえるものである。このときの経緯を振り返って、野間も「規約」に反するということ、これが全党員の心をとらえしめるわけですよ」と述べている。<sup>6)</sup>しかし党は自由な討議を禁じ、「これは明らかに党内分派の論理ではないか」と断言し、「党内のすべてのものが自分が正しいと思っていることのために党の規律や決定を無視し、もしくは軽視していったら、党はどうなるだろうか。党はプロ

レタリアートの前衛党であることをやめ、革命党であることをやめてしまふ」といつて党の原則を示した。<sup>7)</sup>この原則に従えば、党籍を得た作家は、黨員として活動するのであれば党が定めた『党内民主主義』のルールを受け入れることが不可欠であり、『党内民主主義』のルールに沿って行動できないのであれば党を離れるしかない。党内で意見を陳べる権利は与えられているとはいえ、議論が尽くされているかどうかを判断するのは「黨員大衆」ではなく党中央委員会の権限であるとされたのである。

だがその一方で、「規律や決定」の呪縛からの解放を唱えた黨員文化人による要望書には、つぎのような言葉が記されていた。

いまや明らかに反ソ的分裂へ導くような決定にさえ盲従しなければならぬのか。各国の共產党にとって前提的な国際規律を守るべきであるのかのジレンマに深い苦悩をつづけてきたわれわれは、後者を選ぶことこそ共產主義の精神であり、責任でなければならぬ、と確信を一つにした。<sup>8)</sup>

黨員文化人たちはコミュニストとして、国内の党に従うべきなのか、国外の党に従うべきなのか、その「ジレンマ」に苦しみながら国際共産主義運動の「国際規律」を選んだという。しかし、そもそもこの二項対立のなかでしかコミュニズムは成立しないのだろうか。かつてコミンテルンから示されたテーゼに従って、日本社会の労働者が打倒すべき相手を『君主制』から『天皇制』と読み替えたように、コミュニズムは国際的権威に『正統』の起源をおく思想であった。国内の党に異議を申し立

てた野間たち文化人にも、国際的権威に自己の主張の正当化の根拠を求める弱みがあったといわざるをえない。まさしくこれは彼らの精神の根底にコミュニズムが内在化されていないかったことの証左であろう。野間が「暗い絵」において描き出した思想的現実——左翼学生運動家の永杉英作が明晰な頭脳を駆使してコミュニズムを理解しつつも「自分の絶対性が動いていない」とされ、深見進介が「やはり、仕方のない正しさではない。仕方のない正しさをもう一度真直ぐに、しゃんと直さなければならぬ」と『正しさ』の根拠を自己の外側にある権威ではなく、自己の内側にある信条に求めねばならないと胸中を吐露した——が戦後のこの時期に至ってもなお克服されずに残存していたのである。

一九六二年九月二〇日、野間は光子夫人同伴で、横浜港からソ連定期船オルジョニキーゼ号に乗って、ソ連、ヨーロッパ旅行に出発した。ソビエト作家同盟に招待されたのであった。一二月に帰国した。六三年にチェコ語訳、六四年にハンガリー語訳『真空地帯』が刊行され、東欧諸国で野間の名前が知られるようになる。

### 三

日本共産党綱領をめぐる論争は党第八回大会まで引き継がれ、宮本顕治はその採択に向けて党内の引き締めを図った。同

大会は一九六一年七月二五日〜三一日に開かれたが、七月八日に春日は党綱領草案に反対して離党を表明した。さらに山田六左衛門・西川彦義・亀山幸三・内藤知周・原全五・内野壮児の六名が「党の危機にさいして全党の同志に訴う」という声明を發表した。しかし七月二〇日、党は春日の離党を認めず、構造改革・社会主義革命を唱える彼ら全員に除名処分が下りる。

この事態を受けて、七月一九日に新日本文学会の黨員有志は、「中央は綱領草案の民主的討論をさまたげたから、大会を延期せよ」という意見書を党第一八回中央委員会総会に提出した。野間に加えて安部公房・大西巨人・岡本潤・栗原幸夫・国分一太郎・小林祥一郎・小林勝・佐多稲子・竹内実・菅原克己・針生一郎・檜山久雄・花田清輝の一四名によるこの意見書は、綱領草案の審議において反対意見を表明する機会が十分に与えられず、賛成意見を持つ者のみが大会代議員に選ばれるように事前に画策されていたとして党中央委員会の姿勢を非難したのである。

七月二二日、国分・佐多が外れ、あらたに泉大八・且原純夫・黒田喜夫・武井昭夫・玉井伍一・中野秀人・浜田泰三・広末保・征木恭介が加わった二一名のメンバーは「真理と革命のために党再建の第一歩をふみだそう」というアピールを党内外に發表した。さきに出した意見書が党中央委員会に無視されたことで公表にふみ切ったのだという。第八回党大会終了後の八月一日に、さらに七名が加わって「革命の前進のために、ふたたび

全党に訴える」というアピールを發表するのだが、このアピールに関わった武井・大西・針生・安部たちは党規違反を問われて党を除名され、野間には權利停止一年の処分が下された。

戦前から人民戦線の思想に共鳴していた野間にとって、革新戦線の統一を目指す点で春日たちの構造改革・社会主義革命は共鳴すべき点を多々含んでいたのだと考えられる。戦前の左翼学生運動時代から抱えていた社会革命の運動の理想がこれによつて実現されるという確信を持ったのだらう。意見書を提出したことに關して、野間は「もう一度ほんとうに、党と文学、政治と文学というものをこれを通じて検討し直して、そして文学創造というものを確立していこう」というテーマを抱いて行動していたと説明している。

ちなみに中野重治は、第二六回中央委員会総会（三月一〜三日、二五〜二八日）での党綱領草案を決定する際に、神山茂夫とともに判断の留保を表明していたのだが、新日本文学会の黨員有志からの説得があつたにもかかわらず、第八回党大会ではその留保を撤回し、党中央委員会の提案に賛成するという優柔不断な態度をみせた。後に野間は「このときにぼくは、中野さんにたいしてほんとうに大きい疑問をいだいたわけです」と批判している<sup>10</sup>。

一九六四年は日本共産党と新日本文学会とが亀裂が決定的に深まった一年であつた。三月二七〜二九日の新日本文学会第一一回大会では、米英ソの間で合意ができた部分的核実験停止

条約をめぐる、その批准に反対する党と賛成する新日本文学会メンバーとの間で対立が生じた。武井昭夫による一般報告草案「今日における文学運動の課題と方向」が大会開催前の「新日本文学」一九六四年三月号に掲載された。大会終了後に反対意見も取り入れて完成させたものを発表するのが慣例であったが、このような異例の方法が採られたのは、党に対する対決姿勢を鮮明にし、新日本文学会の組織の引き締めを図るためであった。大会準備委員、議長団、資格審査委員会、常任幹事会は、一般報告草案を賛成する人たちが選出されていた。ちなみに党東京都委員会の幹部であった武井は、全学連を支持したという理由で批判されて七月二十四日に除名されることになる。

一般報告草案冒頭の「第十回大会以後、われわれをとりまく情勢はどのように推移してきたか」という章では、部分的核実験停止条約に賛成するとともに、日本帝国主義が自立発展していると考えた党の方針とは明らかに異なる見解が示されていた。さらに「こうした情勢のもとで、文学創造の現状はどのようなになっているか」という章では、「政治の優位性」論にもとづく政治主義が残存し、「文学の優位性」論を掲げる「反政治」主義への動揺が発生しているとして、「運動主体の統一と強化のために、わが文学運動の内部と周辺にあるこの二つの癌を徹底的に批判し克服することが急務でなければならない」と訴えた。

このような武井の意見は、一九六一年二月一五〜一七日に開催された新日本文学会第一〇回大会において、常任幹事で

あった野間が創造活動報告として総括した内容と重なるものであった。野間によれば、独占資本による支配強化と日本帝国主義の復活のなかで、文学者たちみずから安保反対闘争に参加したのは意義深い行動であったという（日本文学の現状と創造の方向）、「新日本文学」第一七六号、一九六二年三月。野間はさらに、戦後文学の主要なテーマの一つであった《政治と文学》の関係が新しい局面に達しているのだとした。

このような状況のなかで、これまでのプロレタリア運動とプロレタリア文学運動時代、共産党とそれに所属する文学者およびシンパとしての文学者によって採用された、いわゆる「芸術に対する政治の優位性」という理論の誤りが明らかにされ、その裏返しとしての政治と文学の二律背反という戦後提出された主張もはやその力を失うにいたっている。

野間は、かつて「近代文学」の平野謙・荒正人と「新日本文学」の中野重治が《政治と文学》との関係をめぐって激しく論争した経緯に触れつつ、文学者たちが党の方針に拠らずに主体的に政治に参加した経験を踏まえて作品を創作しはじめたことによって、《政治と文学》との関係に新しい可能性の地平が拓けたのだとするのである。

野間の提言が広く共有され、新日本文学会第一一回大会回大会以後、幹事会内部に設けられた整理委員会によって清算と事後処理が行われた。新日本文学会が発足した当初は「民主主義



文学の創造と普及」を目的とすると規定していた総則を、朝鮮戦争が勃発した二カ月後の一九五〇年八月、「平和擁護と民族独立のためにたたかう文学」と明確化したのだが、新日本文学会第一一回大会に規約改正がおこなわれて、「新日本文学会は、進歩的・大衆的な文学芸術創造運動のための文学者の団体である」とし、作家たちが政治目的ではなく「文学芸術の新しい創造のために」結集するのだと書き換えられることになった。

大会当日、幹事の江口渙・霜多正次・西野辰吉は、対案を提出しようとして大会議長団によって拒否され、彼らの案は参考意見として希望者にのみ配布するだけにとどめられた。しかし、大会終了後に「文学運動の新しい前進をめざして」（文化評論 第三三号、一九六四年七月）という批判論文を発表した津田孝と彼らは新日本文学会を除名されることになる。除名処分に付された彼らは、翌六五年八月二六日に日本民主主義文学同盟を結成し、「民主主義文学」を継承することを宣言した。

このような混乱を経て、新日本文学会は党による影響力を排除できたものの、民主主義文学を創造するために党派をこえて作家が集まるという新日本文学会の本来の目的は弱められてしまう結果になったのである。

#### 四

一九六四年五月一五日、党の方針に反して衆議院本会議で部

分的核実験停止条約に賛成票を投じた志賀義雄と、彼に同調した鈴木市蔵の除名の方針が五月二一日の日本共産党第八中央委員会総会で決まる。この総会で中野重治はこの処分の決め方について志賀と鈴木とともに反対し、神山茂夫は留保を表明した。五月二五日、鈴木は参議院本会議で部分核停止禁止条約に賛成票を投じることになる。七月一五日、志賀と鈴木たちは週刊「日本のこえ」を創刊した。ソ連共産党機関紙「プラウダ」は翌一六日に賞賛の言葉をもって彼らの行動を伝えた。

野間は一六日に佐多稲子らとともに「党文化懇談会」の名義で党中央委員会に共同の要請書を提出した。野間に加えて朝倉摂・出隆・国分一太郎・佐多稲子・佐藤忠良・本郷新・丸木位里・丸木俊子・宮島義男・山田勝次郎・渡部義通の一二名である。要請書の内容は、党が中ソ論争のなかであくまで国際共産主義運動の統一を団結のために努力するという基本方針を逸脱し、党内で何の議論もおこなわないうまま、公然かつ組織的に反ソ宣伝を強行し、それに反対した者には修正主義者や反党分子という烙印を押して排除している、というものであった。それに対して党は「一部文化人黨員の『要請』について」（『アカハタ』六月二九日）を発表して反論した。その記事によれば、野間たちが名を連ねて意見を具申したことは分派活動に当たり、党内の問題を党外に持ち出したことも規律違反である。党が反ソ的立場をとって国際共産主義運動を分裂させているとするのは事実にもとづかない中傷でしかない、というのである。

党第一〇回中央委員会総会（八月二三、二七日）で神山茂夫と中野重治の党員権が三か月間制限される。九月一日、神山と中野は東京ダイヤモンドホテルで記者会見をおこなって、「党内外のみなさんに」という党批判の声明を発表すると、九月三日『ブラウダ』と国営タス通信がその内容を好意的に報道した。それに対して党は第一一回中央委員会総会（九月二五、三〇日）で両名の除名の方針を決める。中野に対する処分<sup>14</sup>の理由として、中野が『反党修正主義者』に同調していたことがあげられている。さきにみたように、新日本文学会第一一回大会において、党員作家たちが武井の一般活動報告への対案を提出しようとしたのを妨害し、対案を取り上げないことに積極的な役割を果たした、というのである。

一〇月三〇日、志賀・鈴木・神山・中野は衆議院第一議員会館で記者会見をおこない、「みなさんに」という共同声明を発表した。党第九回大会（一月二四、三〇日）で志賀・鈴木・神山・中野の除名が正式に決定される。彼らは二月二日に「日本共産党（日本のこえ）」を結成して、党に対抗する姿勢を明らかにした。

ところで一〇月一四日には、「さきの要請が憂えた事態は、いよいよ破局的な形で展開している」として、再び野間や佐多たち一二名が党指導部を批判する声明を発表していた<sup>15</sup>。彼らによれば、さきに提出した要望書が顧みられなかったことに加え、志賀、鈴木につづいて神山、中野を除名したのは「指導部

の思想の弱み」であるとし、「幹部専制と官僚主義的思想管理のもとに、党内民主主義は死にひんしている」という強い言葉を使って厳しく批判した<sup>16</sup>。この声明も『ブラウダ』に掲載されるのだが、党は11月9日、本郷と宮島を除く一〇名に除名処分を下したのである。

野間によれば、「その除名は誤りであると考えており、認めていず、この虚偽の党指導部の誤りをただしてゆこうと考えています<sup>17</sup>」。そして「党をよくする」という目標は決して一つの政党の問題にとどまらず、日本の政治全体を良くしたいということであり、さらに「現代の人間の悪行一切をじっと見つめ、現代の悪行から自由になり、現代そのものから現代をつぎぬける方法をその日本人の悪行の大系のうちから引き出すもの<sup>18</sup>」である。そこにあるものは「これから始まるぼくの後期の文学を導く目標」で、それこそが「新しいコミュニズムの文学であり、新しいコミュニズムの文学を開くものとなるもの<sup>19</sup>」であるというのであった。

では、野間における「後期の文学」とは何であったのか。党から除名された野間が「ぼくは自分を極悪者であり、愚者であつて、そして日本文学を根底から変革する力と可能性を持っているもの<sup>20</sup>」という自己認識を明らかにしたことから、一つは『わが塔はそこに立つ』にみられるような仏教思想——親鸞への傾倒——につながる道であり、もう一つは部落解放運動にたずさわりつつ、畢竟の大作『青年の環』を完成させる道であった。



一九六九年七月、同和対策事業特別措置法（同対法）が施行され、国や地方自治体の責任で被差別部落の生活、教育、雇用の環境改善、福祉の向上などが図られるようになった。だが同時に党派の対立がそこに持ち込まれ、日本共産党員である中学教師に対して部落解放同盟が糾弾をおこない、法廷闘争に発展するという大阪の矢田教育事件が発生した。「糾弾権」の存否が法廷で争われるに至るのだが、この事件の背景には、党派的な対立の激化が存していた。野間も「部落差別批判——矢田教育差別事件をめぐって」（『新日本文学』第二四卷第二二号、一九六九年十二月）で土方鉄、国分一太郎と鼎談をおこない、部落解放運動を全アジアの解放へと結合してゆくことの重要性を訴えている。野間によれば、この前年インドの不可触賤民とカースト制を現地調査してきた、部落解放同盟の指導者である北原泰作も同じ意見を持っているのだという。

部落問題というのは沖縄問題でもあり、在日朝鮮人の問題でもあり、アジアのカーストの問題でもある。インドではカーストというが、朝鮮にもあるし、各国にも同じ問題がある。これを解いていく問題として、全アジアを解放する、基礎にある問題というか、そういうものとして部落解放の方針というのが受け入れられていけないといけないし、逆に部落解放同盟の運動そのものが、全アジアの解放に積極的に自分の共通の問題として進んで結合してゆくということがなければならぬ<sup>20</sup>。

このような野間の発言の後、土方が「部落民自身だって沖縄の人間に対して差別する、あるいは在日朝鮮人に対して差別するというのが残念ながらある」という事実に触れると、野間は「部落の人自身に、差別意識というか劣等感がある」とし、その意識を解消する闘いを貫けば、ガンジーでさえ撤廃できなかったヒンズー教の不可触民に対する差別を撤廃し、全アジアを解放することができるのだとするのである。

このような主張の基本にあるのは、日本社会の部落差別は「古代制・奴隸制・封建制・資本主義制・社会主義」というマルクス主義における社会の発展段階の前にある「アジア的生産様式」に原因があるとする考え方である。野間によれば、部落差別の解消は、ヨーロッパの革命とは質の異なる、全アジアの解放に繋がる可能性のあるものだ<sup>21</sup>という。一九七〇年九月、野間は『青年の環』六部作全五巻を脱稿する。完成まで二三年を要した八〇〇枚の大作は、被差別部落における《反社会性》を体現した田口吉喜という人間に対する認識を媒介にして、自死の瞬間にというパラドックスを孕みながらも大道出泉が社会革命に向かう真の主体を形成するクライマックスを迎えるのであった。このようなねじれを持った主体のあり方は、階級闘争を通じて人間を解放するというそれまでのプロレタリア文学や民主主義文学にはなかつたもので、野間が目指した「新しいコミニズムの文学」の一つであつたといえよう。

注

- (1) 窪田精『文学運動のなかで 戦後民主主義文学私記』（一九七八年六月、光和堂、二八〇頁）
- (2) 「第七回党大会中央委員会の政治報告から」（『日本共産党の五〇年問題について』、一九八二年二月、新日本出版社、三一〜三三頁）
- (3) 「第七回党大会党規約改正についての中央委員会の報告から」（同右、三五〜三六頁）
- (4) 同右、三五頁。
- (5) 「一部文化人党員の「要請」について」（『前衛』第三二五号、一九六四年一〇月、五五〜五六頁）
- (6) 野間宏「日本共産党の二十年」（『展望』第七六号、一九六五年四月、引用は『野間宏全集』第一六卷、一九七〇年11月、筑摩書房、六五八頁）
- (7) 前掲（5）、五六頁。
- (8) 同右
- (9) 前掲（6）、六五七頁。
- (10) 同右
- (11) 武井昭夫「今日における文学運動の課題と方向」（『新日本文学』第二二〇号、一九六四年三月、二二四頁）
- (12) 野間宏「日本文学の現状と創造の方向」（『新日本文学』第一七六号、一九六二年三月、一一二頁）
- (13) 新日本文学会幹事会「新日本文学会第十一次大会の成果と今後の課題」（『新日本文学』第二〇七号、一九六四年一〇月、一二二頁）
- (14) 「分裂進める日共幹部」（『朝日新聞』一九六四年一〇月二五日）
- (15) 「分裂進める日共幹部」（『朝日新聞』一九六四年一〇月二五日）
- (16) 「ブラウダ、野間氏らの声明を掲載」（『朝日新聞』一九六四年一〇月一九日）
- (17) 前掲（6）、六五九頁。
- (18) 同右
- (19) 前掲（6）、六六〇頁。
- (20) 鼎談「部落差別批判——矢田教育差別事件をめぐる」（『新日本文学』第二四卷第一二号、一九六九年一二月、九五頁）
- (21) 野間宏「被差別部落は変わったか」（『野間宏全集』第一三卷、一九七〇年八月、筑摩書房、四九頁）

「おにし やすみつ 本学教員」